

守られているしあわせを

松隈玲子

(西南女学院)

明るい空、さわやかな風、樹々のみどり、そして暖かい太陽の陽ざし、どの一つにも自然のいのちの育くみを思う五月です。自然界のめぐみをゆたかに受けて、生あるものがそのいのちをいきいきと躍動させるこの月、子ども達と共に身近な自然のうつりかわりや、動植物の成長に心をとめるものでありたいと思います。

四月に入園あるいは進級した子どもたちは、こよみの上ではそれぞれに園生活一カ月をすごしました。入園児にとっては、はじめての社会集団である保育集団への参加という、大切な節目の時であったと言えます。幼稚園、あるいは保育所に入園した子どもたちは、家族集団から保育集団への移行というよりも、家族集団と保育集団との二つの集団の間を往復しながら、それぞれの集団の人やものの影響をうけて成長し変化していきます。子ども達はこの一カ月の園生活をどんな思いですごしてきたでしょうか。一人ひ

とりの子どもにとって幼稚園保育所は楽しい所、暖かい所、そして保育者は慕わしい人であったでしょうか。

入園当初の子どもたちの殆んどは、不安と緊張の連続であり、主体的にいきいきと遊びを展開したり、集団の一員であるという自覚にもとづいた行動をとれる子どもはほんの僅かです。ことに近年は家族集団の核家族化、同胞数の減少、近隣の子どもたちによる小集団あそびの欠如などの要因によって家族集団と保育集団との間に大きな落差を感じる子ども達の数が増加し、ほんとうにその子らしさが見られるまでにかかりの日数を要するようになりました。表面的には保育者の設定した園生活のリズムのついでに集団としてまとまった行動がとれるようになり、園生活になじんだかのように見える子どもたちの一人ひとりをよくみると、自分の思いを十分に出せないまま、保育者の指示どおりに動いている、主体的に集団に参加しているのではなく

て、参加させられている子どものいることに気づきます。

そして今、はじめての園生活での新鮮な体験、ものめずらしさがなくなつてみると、努力やがまんのいらぬ家族集団での生活がたとえようもなく恋しいものに感じられ幼稚園にいきたくないという思いがつのつて、友だちに遊具をとられた、給食のミルクをこぼしたなどという表面的にはほんの些細なできごとが引金となつて、登園をしづる子どもがあらわれてくるのもこの月です。

進級児においても、新入園児を迎える心構えは頭の中では十分にできていても、実際に新入園児を迎えてみると、なかなか思い通りには事が運ばず、せっかく張り切つて門まで出むかえ「おはよう、一緒にあそぼうね」と誘いかけると、「いや、こんな人知らないもん」と拒否されてオロオロしていた年長児、自分より小さい三歳児の世話をしようとはり切つていたのに「手伝つてあげようか」というと「自分でするからいい」とことわられしよげていた年中児も、どうにか新入園児との対応になれて、少しずつほんもの進級児としての自覚が育ちつつあります。

この時期保育者は集団の個々の子どもと心理的にも物理

的にも十分にかかわりをもつことが大切です。

碧巖録に「啐啄迅機さつたくじん」ということがあります。本来は師弟の人格のふれあいによる仏祖の生命を伝える意をもつことばですが、このことばを通して雛の孵化する時期が熟すると雛は内から卵のからを啐き、親鳥が外から啄くように、保育者は子どもたち一人ひとりの成長の節を適切にとらえ、最もふさわしい方法で援助していくことの大切さを学ぶことができます。

成長の節を的確にとらえる目、それは肉眼で見える現象ばかりではなく、見えないものを見る目、即ち第三の目ともいえる心の目です。私たち保育者に要求されるのは、今は外から見えなくても、一人ひとりの子どもがもっている可能性の育ちを大切に目守る目を持つことです。

「心でみなくっちゃ、ものごとはよく見えないってことさ」と星の王子さまにキツネが教えてくれたように、一人ひとりの子どもの心によりそつて、子どもと同じ背の高さになり、同じ窓から共に外をみながら、いのちの尊さ大切さをうけとめさせ、たくさんの人やものから守られていることのおいしさを感ずる心を持ってほしいと思います。